

# 大 学 野外教育とその指導

## 研究指導 業 務 内 容

十文字学園女子短期大学

千 足 耕 一

野外教育あるいは冒険教育の効果には、①自己の発達、②人間関係の理解、③自然環境の認識、④野外生活技術の上達などが挙げられている。キャンプに代表される野外教育では、①自分と自然との関係、②自分と他人との関係、③自分と自分との関係といったことについて、発見したり、拡大したり、理解を深めることが目標とされている。近年では環境教育の必要性が叫ばれ、多面的なアプローチがなされている。野外教育は、野外活動という実

践・実体験を通じて、人間の生きていく環境について直接考え、エコロジカルな思考を獲得し、環境の保全等を目指していくものとしての価値を持っている。このように意義が説明される野外教育活動の中でも、筆者がこれまで展開してきた主に水辺を活動の場とする野外活動について、実際の受講生の感想等を交えながら、それらの活動が現代の大学生にとってどんな意味を持っているのか、また、指導のポイントはどういったことであるのかを考え

てみたい。

一 生きていく喜びの実感

自然の中で人間が活動することは、生きていくことの喜びを実感することであろう。豊かな自然の中で発見し、驚き、知的な好奇心を満たしてくれる活動は、まさに生きていく感覚、生命感に満ちたものである。活動している時の夢中になっている感覚ややり終えた後の充実感や達成感といった喜びを体験させたりあるいは共有したりすることが、野外教育の場面にあると考えたいと思う。技術や知識は、こういった喜びを実感し、深めることに直接結びついており、さらに大きな喜びを得るための基礎となると考えられます。

二 自然が教えるということ

それぞれの野外活動には、その活動に適した自然環境が背景にあること

が、最も大切であると考えられます。例えば、素潜りをするためには、水の温度や透明度、生物の豊かな海域が適しているというようにです。そういった中で、自然への態度・接し方について学習者に伝える必要があるでしょう。自然と人間が共生していくためのローインパクトな行動技術といったようなことです。

素潜りを行った学生たちは「こんなものが生きているのかという驚きがあった」「自分の身体を使って、肉眼で海中の世界を見ることができたことに満足している」「見るもの全てが新しく、驚き、そしてもっともっと知りたいたく思いました」と述べ、さらに「自然を知ることが自然を愛することにつながる」とも述べています。この他「自然を身体全体で感じることができた」「自然とかかわることの楽しさを

学んだ」といったように、活動を通して、自然をより身近にとらえたり、考えたりしたことが見受けられました。このように自然と自分との関係について発見したり拡大したりできるような豊かな自然環境を活動の場として提供することが重要であると考えられます。教育効果は第一に自然が決める、あるいは、自然こそが学生にとっての学校であり教師であるといっても過言ではないでしょう。

三 自然の中の安全

自然の中で活動を行う上で、安全の確保ということは大切です。自然の中の自分の命の守り方を知ることが、学生にとって最も基本的に必要なものであり、同時に危険の予知や回避の仕方も学ぶべきです。こういった中で、人の生命がいかに大切であるかを知ることとなるでしょう。安全について

は、最大限の配慮をし、常に三重・四重の安全弁を設けて活動します。例えば、スキндаイビングでは、自分での確認、仲間の確認、指導者の確認、安全のための監視、船からの監視など一つのミスだけでは重大な事故や生命の危機に至ることがないようにするわけです。また、必然的に指導は少人数教育体制となります。(通常のクラスは学生四〇〜五〇名に対し教官一名程度ですが、野外活動の場合は十名以下の学生に対し、教官一名、アシスタントや補助が付くようにしています。こういった体制が安全性を高めると共に学生のやる気を起こす材料となるといえると考えられます。

四 振り返り、気づきから自ら考え、行動、評価することへ

野外での活動では、活動を行った後必ず振り返りを行います。よく振り返

返る、省みることから新しい発見や気づきが得られることもあり得ます。やっただらやり放しではない、この振り返りの活用が大切な教育的要素なのです。また状況を判断するにあたっての情報収集も大切となります。自分の五感、仲間の目、指導者の目といった情報を自分の中で総合的に評価し、次のプランを練るわけです。ボードセイリングを経験した学生の感想には「自然の状況が刻々と変化する中で、適切な判断を下すことの難しさを知った」「身体（が行うこと）と頭（で考えること）を一つにすることの大切さを感じた」「自分の状況を把握し、結果を分析、原因をさぐり、次の目標を設定するといった問題解決の課程を学習できた」などと述べています。振り返ることから問題解決の方法を学習できる可能性を野外教育は含んでいると考え

られます。

### 五 状況の判断とトライする環境づくり

学校や家庭といった日常生活場面では、学生が自分自身で状況を把握し、判断し、行動し、それを評価するといった機会は、そう多くはないでしょう。野外教育ではそういった場面が多く提供されます。また、主体は学習者であり、教授中心ではなく学習者が中心となります。教師は、学生自身が持っている全能力を発揮し、解決しようとするといった環境を準備する必要があります。それはチャレンジするあるいはトライする環境をつくることです。取り組もうとする学生が「ちょっと危ないかな」「できるだろうか」「何とかやってみよう」と思うような状況です。これには周囲の状況とトライしようとする人の技能、精神状

態といった力を総合的に指導する人が見極める必要があるでしょう。冒険教育で用いられている「見せかけのリスク」を提供するということです。これによって学生の全力を尽くし、挑戦する意欲をかきたてるようにするわけです。チャレンジさせる状況づくり、成功体験を与えていくこと、これらがトライする人の「やればできる」という自信につながり、人間的な成長をもたらすと考えられます。言い換えれば、新しい自分の発見をもたらすということでしょうか。これに関連して、ボードセイリングを経験した学生の感想では、「どんな状況になってもあきらめずにやってみようとする態度を学んだ」「できないとか多分無理といった考えを持っていると何も進歩せずに同じことを繰り返してしまふ。できると信じていることが大切だということ

だ」といった記述が見られました。他に「小さな前進ではあるが、上達、獲得する自己成長は質の高い楽しみであった」とも述べています。これらのように「自信を持って行動する」「チャレンジ精神を持つ」といったような大切な示唆を得ていることは、大きな教育効果があったものと考えられます。

### 六 集団生活と自分自身の理解

野外活動の教育においては、非日常的な空間へ出かけていって、集団生活が営まれることが多くあります。活動中のいろいろな人間関係を体験しながら、友人関係を改善したり拡大していくと考えられます。二人以上が合わさることによって生じる社会と、その社会への適応といったようなことが、野外教育の効果の一つとしてあげられます。授業・実習を通じて、「教官や仲

間が、普段の学校では見れない姿に映った」「一つの行事を行うのに様々な人々の助けがあることを身にしみて感じ、感謝の心でいっぱいです」と述べた者も居ました。体験を通じて得られる他者の認識はより深いと考えられます。こういったことから「他人のために尽くすこと」や「物事全体を見渡すこと」といった態度が培われると考えられています。

まとめにかえて

教育が問い直され、そこでの課題、キー・ワードとしての「自己教育力」「問題解決能力」「創造力」や「感性」といったことは、教育現場でそれらの育成について考えたり、方法を開発してゆくことが必要なのでしょう。

野外教育では、体験と結びついた知識、知恵を獲得し、実行するというようなことも一つの目標であると考えま

す。言い換えると、「実行型」の学生を育成するということでしょうか。このような観点から、行動することの大切さや問題解決の方法論を伝えていく可能性のある野外教育を考え、展開していければと考えています。そのために必要な自然に関する知識をより多く獲得し、野外での活動に不可欠な技術を磨いていくことが指導上重要であると考えます。

(共通・基礎分野講師 野外教育)

#### 参考文献

(1) 飯田稔、アドベンチャープログラムの教育的意義、学校体育 51-5、1980

(2) 飯田稔、子どもの野外生活経験、体育の科学、58-8、1986

(3) 野外運動研究会、野外運動・野外教育の理念について考える、野外運動研究第九巻一号、1986